

子供は みんなの宝

漁業後継者育成を婦人部の手で

有明町漁業協同組合

湯江 漁協婦人部

松本 秀香

1. 地域の概況

有明町は、人口およそ12,000人、島原半島の北部に位置し、南に雲仙を控え眼下に干潟で有名な有明海を望む漁業と農業の町である。雲仙普賢岳が噴火し、平成2年6月の大火災流によって有明町では大きな被害はなかったものの、隣りの島原市を中心にするまで地獄のような有り様を見る思いだったが、昨年終息宣言もだされ復興に向けて頑張っている。

2. 漁業の概要

漁業は、地元では「ガネ」と呼んでいるガザミが主要魚種で、組合員の約半数がカゴや網でカニ、イイダコ、アナゴ、イカといった漁船漁業を営んでおり、また海苔養殖では県内一の生産高をあげている。

3. 研究グループの組織と運営

有明町漁協は、昨年9月1日に湯江漁協と大三東漁協が合併して出来た組合員数277名の漁協であるが、婦人部は、8年度より新たに「有明町漁協婦人部」として発足する計画となっている。湯江漁協婦人部は、部員数141名、部長ほか役員20名で主に「環境保全」「漁業後継者育成」「漁協全利用」などの諸活動に取り組んでいる。

4. 研究・実践活動課題選定の動機

有明町に限らず殆どの漁村では、若者の都会流出や漁業ばなれ等から後継者不足と高齢化がすすみ、また地元の子供たちの海や漁業への関心が年々薄れてきている。県下の漁協婦人部員を対象に実施されたアンケート結果でも、「子供や孫に漁業を継がせたいと思う」と答えたのはわずか全体の20%にすぎず、現在漁業を営む私たちが、自信をもって子供たちに「漁業の大切さや素晴らしさ」を伝えることができなくなっている。このことを深く反省し、また将来に希望もてる漁業の振興と漁村発展の大切な役割を担うのは漁協婦人部であると考え、平成4年度から県下の漁協婦人部共通の活動課題として「のびのび海の子常会」の開催が提案された。

そこで、私たちも地元の子供たちに、もっと海や自然に親しんでもらうことを通して、漁協婦人部とのふれあいの機会をつくり、そして私たちが最も力を入れている「環境問題」に関心をもってもらうこと等を目的にさっそくこの活動に取り組むこととした。

5. 研究・実践活動状況及び成果

そこで、まず役員会を開き、開催時期を子供達が集まりやすい夏休み期間中と決め、内容は子供の喜びそうなイベントと学習効果のあるものを取り入れることにして、ビデオ上

映、親子綱引き大会そして生きた魚を使っての合成洗剤と石鹼の実験をすることにした。次に子供たちへの呼びかけについては、地元育成会の役員にお願いしたり、子供会や婦人部員の各家庭にチラシを配付した。

当日、漁協会議室に集まった子供は60人。ワイワイガヤガヤ大騒ぎ、初めての子供達の集会で面食らったが、ビデオがスクリーンに映った途端に静かになり、メインテーマの魚の実験では、合成洗剤を入れた水槽の魚が苦しみ死んでいく様子を真剣に見入る子供たちの目を見て”これだ!”とこの常会の成功を確信した。

終了後に子供達から寄せられた感想文や絵日記には、合成洗剤の恐ろしさがつづられ、また子供が母親に「洗濯する時は漁協の石けんを使って」と頼んだと言うエピソード等を耳にして、案ずるより生むが易し、やってみて良かった、また来年もやってみようと思いが湧いてきた。

翌年度の海の子常会では、漁協婦人部が中心となって、町内の婦人団体に何回となく呼びかけてやっと結成にこぎつけた「有明町 海と川を守る会」での活動をきっかけに、環境問題をテーマにとりあげ実施した。

ビデオ上映の後、自分たちの身近な自然が変化してきていることを知ってもらうため、牛乳パックを見せながら、毎日何気なく捨てているパックを作るには何本もの大きな木が必要なことを説明し、自然の木を大切にするためにリサイクル活動に取り組もうと呼びかけた。そして、夏休み中に牛乳パックを集めて、漁協に持ってくることをみんなで約束した結果、9月には子供達から約500個の牛乳パックが集まり、婦人部役員が代表して町内のリサイクルを呼びかけているスーパーに引き取ってもらった。

さらに、6年度の第3回の海の子常会の企画では、外へ出て何かやってみよう、と言う話が持ち上がったが、野外活動は天候やケガの心配があった。しかし、最近の子供達は、目の前に海があるのにプールでしか泳げなくなっていること、浜で遊ぶ姿がほとんど見られなくなっている等、自分たちの子供の頃とは随分と遊び方が変わっていることに気づき思い切って野外で実施することにした。テーマは、「ミナ(=磯ナ)とり大会; みんなで浜に出て、ミナとりをしよう!」に決めた。

その準備を進めていたある日、老人会の会長さんから「漁協婦人部の、子供達とのふれあい活動に、ぜひ一緒に参加させて下さい」という申し出があった。また、小学校の父兄会の方からも「県から指定された”平成の寺子屋事業”と合同で開催させて下さい」という申し出がある等、いつの間にか地域からも注目され、地域をまきこむ活動に成長した。

炎天下、老いも若きも帽子に長靴、首にはタオル、手にはバケツ姿で浜に大集合した海の子達やお母さん、「ミナ」がどんなものか知らない子供達に老人会の方々から種類や居そうな場所、食べ方などを教わって一緒に磯に出てみると「ここにもおったよ!」「あそこにもおる!」と子供達の楽しそうな歓声が磯にひびき、海の子常会は大成功であった。

近頃では、夏休みが近づくと「今年も子供達が楽しみにしているよ」という声を聞き、嬉しい反面、期待に応える内容を考えるのも一苦勞であるが、第4回目を迎えた昨年は、地元で最も水揚の多いカニとイイダコの漁法や漁業のことを教えることになった。実際に使用している漁具を会議室に持ち込み、婦人部役員の実演を交えての説明に、子供や若い母親までもが「こんなにして獲るなんて知らなかった」と感心したり驚いたり、又海の汚染や網に入るゴミ問題にも関心は集まった。

学習が終わったあと、老人会から郷土料理の「だご汁」をふるまってもらい、イイダコの墨で口を真っ黒にしなが、みんなで楽しく昼食をとった。

6. 波及効果

毎年、子供たちの純粋な心にふれる度に「やって良かった」という実感が湧く。また、思わぬ効果として、若いお母さん達が子供と一緒に参加してくれるようになり、漁協婦人部活動に対する理解も少しずつ深まっているのではないかと考えている。子供たちの将来を思う気持ちは、高齢者も私達も若い母親もみんな同じであり、今までは別々に活動していた地域内の組織が、子供を通じて横の連携がとれるようになったことは、漁協婦人部活動自体の広がりとおわせて地域の活性化を図る意味からも大変有意義なことである。

7. 今後の課題

当漁協は青壮年部活動も活発で、ガザミの中間育成と放流、資源保護のため産卵期の自主休漁など、頼もしい後継者が育っている。しかし、私達は更にその後を受け継ぐ子供たちに目を向けて、合併した大三東漁協婦人部とも手を取りあい、知恵を出し、工夫を凝らしながら「のびのび海の子常会」をもっと盛り上げいきたい。さらに、近隣の育成会や老人会等の団体に加えて、有明町内の婦人団体でつくっている「有明町 海と川を守る会」にも参加協力を呼びかけることで、もっと広い範囲の子供達を対象に海の子常会を実施するとともに、みんなの宝である子供達とのふれあいを通して合成洗剤追放などの環境保全運動についても、地域や町全体に広げていくことをめざしたい。